

続生きていたということがございまして、いくつかの設備については機能が喪失したわけですが、電源もあったというような状況の中で少なくとも1系統が動いていたということで、海水へのヒートシンク機能が維持され、冷温停止にもっていったという例でございまして、この6ページ目と7ページ目の冷温停止の時間帯というのを見ていただきますとわかるように、7ページの方は比較的早期に冷温停止にもっていったということでございますが、6ページの方は、復旧のための一定の時間を要したということもありますので、福島第一でいうと20日前後、福島第二の関係でも14日あるいは15日というようなところまで、冷温停止にもっていくのに時間を要したというような状況でございました。

以上が資料2-1の被害状況についての御説明ということでございます。

それから、続きまして資料2-2でございまして、これが今回、炉心損傷に至った1～3号機の冷却あるいは代替注水の対応状況がどうだったかということについて御紹介している資料でございまして。

済みません。目次のページが間違えてございまして、ここは最初に訂正させていただきたいと思っておりますが、1番目のところは2ページ目で結構ですが、2.のところは10ページから始まっております。それから3.が15ページから、まとめが19ページからということになっておりますので、それぞれ10、15、19ということで訂正いただければというふうに思います。

まず、1号機について2ページ目以降御紹介したいと思います。

1号機はどういったような流れになったかといいますと、最初地震がありまして、それを検知して自動停止した。

その後、地震によって外部電源が喪失したわけですが、非常用ディーゼル発電機が起動しました。冷却系でいいますとICが起動したということでございまして、津波が来る前はICの操作によって圧力を調整していたということでございます。それは左側でございますチャートでもそういったところが読み取れるかと思っております。

ただし、津波が来た後に非常用ディーゼル発電機もだめになりまして、更に直流電源も被水したということで、前回御紹介しましたが、そういったところでHPCIも使用できなくなってICも作動状況が不明、恐らく機能していなかったのではないかというふうに思われます。

また、こうした状況がなかなか緊急対策上、これは発電所の中の本部、発電所長などが全体の指揮をとっている場所でございますけれども、中央操作室からそちらの方への連絡が十分ではなかったということで、ICの状況の本部での理解というものが正しくなされていなかったということが、当時ございました。

3ページ目でございまして、ICの冷却の状況について、当時どういった対応をしていたのかということについて、私どもの方で職員にヒアリングをいたしました。

この結果、詳細につきましては、今日お出ししております「参考資料3」ということで、その保安調査の結果については詳細を御紹介しておりますので、またこれは改めてごらんいただければというふうに思います。

資料2-2の3ページ目に記しておりますように、当時操作がどうであったかということについて、かいつまんで申し上げますと、まず、津波が来る前、電源喪失に至るまでは原子炉スクラム事故でMSIVが閉といった場合の手順が手順書として定められておまして、基本的にはそれに沿ったような対応が進められていたというふうに考えられます。

当然のことながら、手順書での操作というものは中央制御室での制御盤の操作を基本としてお